

## 日常異変 コロナの私(1)

今こそ若者たちに委ねていかねば

赤いカーネーションは、すっかり母の日のお花になってしまいましたが、世界初の、労働者による自治政権パリ・コミューン（1871年）の立役者、女性革命家ルイズ・ミッシェルの「赤いカーネーション」という詩を見つけました。パリコミューン初期から肌身はなさず身につけた、赤いスカーフの切れはしを、花にみたてて、処刑される前の、15歳年下の恋人に送ったものです。

### 赤いカーネーション

私が暗い墓へ入ることがあれば  
兄弟たちよ、あなたの姉の上に投げてほしい  
最後の希望のごとき  
満開に咲き誇る赤いカーネーションを。

帝政の末期、  
民衆が目覚めつつあった時、  
赤いカーネーションは、彼らの微笑みそのものであり、  
すべてが再生しつつある、と告げた。

今、闇の中で花咲くがよい、  
暗く悲しい牢獄の闇の中で。  
暗澹としたその虜囚の傍らで花咲くがよい、  
そしてその人に告げよ、私たちが彼を愛していることを。

その人に告げよ、時は足早に過ぎ

あらゆるものは未来へと委ねられるのだと、  
あの勝者は敗れたもの以上に青ざめて  
滅びていくであろうと。

.....

「あらゆるものは未来へと委ねられる」というフレーズに、心打たれました。  
コロナ後の世界を、今こそ若者たちに委ねていかねば、という気持ちにさせら  
れました。

コロナの現在をどうぞご自愛専一にお過ごし下さいますよう。

筑紫 みずえ